棚田を彩るスイセンと棚田ライトアッププロジェクト

～耕作放棄された棚田の有効活用に関する新提案～

●九州における棚田の魅力

日本における米の歴史は今から約 3000 年前の縄文時代後期から始まっている。特に九州地方では大陸から稲作が伝来し、弥生時代には水田稲作技術が発達しその技術は日本各地へ広まった。現在でも九州一の米の産地である筑紫平野を中心に稲作が盛んに行われている。

米づくりは平野部だけでなく中山間地域に広く分布した。それが棚田である。棚田の果たす役割は様々で「食料生産」「保水」「洪水調整」「国土保全」「生態系保全」「景観保全」等が挙げられる。農林水産省は多面的機能を有している棚田について、その保全や整備活動を推進し、農業農村に対する理解を深めるため、優れた棚田を『棚田百選』として認定している。『棚田百選』は現在 134 地区の棚田が登録されている。そのうち約 35%である 47 地区は九州に存在し、浜野浦の棚田（佐賀県）・星野村の棚田（福岡県）・波佐見地区の棚田（長崎県）等が有名である。

●棚田の現状と課題

現在の棚田は、営農者の高齢化、棚田の維持管理の難しさから耕作放棄地が増加傾向にある。営農者の高齢化に関して保田（2007）は 2015 年には島根県吉賀町大井谷地区にある棚田の 5 割以上が 75 歳以上の管理者によって耕作されると推定したデータもある。維持管理の難しさに関して棚田の場合、傾斜地で段々になっているので大型の機械を入れられない点や、手入れが行き届かなくなった棚田周辺には雑木が生い茂り収穫時期にはイノシシ被害に悩まされる点等が挙げられる。しかし棚田が衰退してしまうと大切な役割である「洪水調整」や「国土保全」等が失われ中山間地域の衰退をさらに促す要因になりうる。そこで現在の棚田を保存する動きが近年高まっている。例えば合田（2001）によると、都市住民に棚田の利用契約を結ぶ棚田オーナー制度や保全基金の設立といった対策がとられている。他にも耕作放棄された棚田の有効活用としてそばやブルーベリー等の稲以外の作物の生産や花の栽培等に利用されるといった別の活用法を実施している地域もある。以上より中山間地域における棚田が担う役割は非常に大きいだけでなく地域活性化や地域の伝統を守るために棚田は必要なものである。

●新たな棚田の活用法の提案

さて、私たちが棚田の魅力と言われて最も思い浮かぶことは景観が良いということではないだろうか。田んぼに水が張られ、いくつもの鏡面がきらきらと輝く春、稲が青々と生育し風に吹かれてゆらゆらと揺れる夏、黄金色に輝く稲穂が一面に広がる秋、雪景色に包まれる冬といった四季折々に変化する風景に魅了され棚田へ足を運ぶ観光客も多い。しかし九州地方の棚田の場合は冬の降雪が少ないので冬の棚田は空き地となり閑散とした風景となってしまう。

そこで現状管理されている棚田・耕作放棄された棚田の両方で実現可能な新たな冬の棚田の楽しみ方を提案する。それが**『棚田を彩るスイセンと棚田ライトアッププロジェクト』**である。これは冬の棚田にスイセンを植え、昼間は棚田一面に咲くスイセンを眺め、夜は棚田をライトアップし幻想的な世界を

図-1　白米千枚田の棚田のライトアップ

図-2　水仙の里公園

作り観光資源の 1 つにするプロジェクトである。

棚田のライトアップの先行事例として石川県の白米千枚田（図-1）が挙げられる。白米千枚田は観光資源の観点から保存が進められている棚田で毎年多くの観光客が訪れている。特に冬に行われるライトアップは冬の風物詩として好評を得ている。

今回のプロジェクトでは棚田を単にライトアップするだけでなく昼・夜の両方を楽しんでもらえるように冬の代表花であるスイセンを棚田に植え景観を保全する。九州地方では長崎県の野母崎地区（長崎県）のスイセンが有名で、野母崎地区のスイセンは九州を代表するスイセンのブランドであり、野母崎地区のスイセンが多く植えられている「水仙の里公園」（図-2）は『日本のかおり百選』にも選ばれ多くの観光客が訪れている。そして**このプロジェクトの最終イメージを図-3 に示す。**このプロジェクトに棚田の活用で中山間地域での冬の新たな棚田の魅力につながるだけでなく耕作放棄地の棚田の有効活用手段にもつながり九州の山間部地域新たな観光資源の 1 つになるのではないかと考えられる。

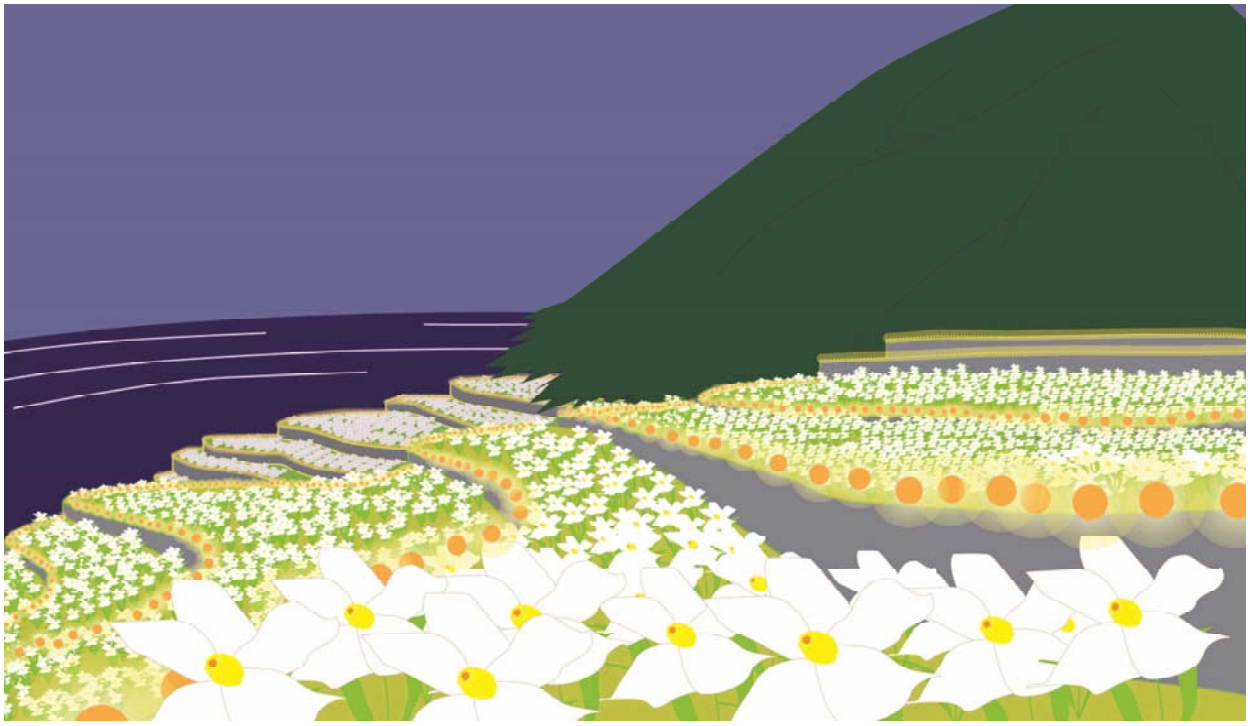

図-3　棚田を彩るスイセンと棚田ライトアッププロジェクト最終イメージ

●本プロジェクトを耕作放棄された棚田の活用法の 1 つに

今回耕作放棄された棚田の新たな活用法として本プロジェクトを提案した。本プロジェクトを行うことは中山間地域の新たな観光資源の 1 つを作り上げていく他にも、現状の中山間地域が抱える棚田の保全や維持管理の課題に関して多くの人々に知ってもらう、興味を持ってもらう点も本プロジェクトの重要な目的である。耕作放棄された棚田は「食料生産」としての機能は薄れたとしてもその他の地域を守る役割である「洪水調整」や「国土保全」といった重要な役割を担っていることに変わりはない。このプロジェクトが実現することで棚田保全に関心を持つ人が増え、棚田の維持管理に協力したいという人が増えるきっかけにつながると良いのではないかと考えられる。

＜参考文献＞

・特定非営利活動法人棚田ネットワーク HP　http://tanada.or.jp/

・保田祐子（2009）：棚田保全体制の現状と課題 –島根県吉賀町大井谷地区の事例-　水資源・環境研究 VOL.20

・合田泰行（2001）：棚田保全施策の仕組みと「中山間直接支払い」　農林水産政策研究所